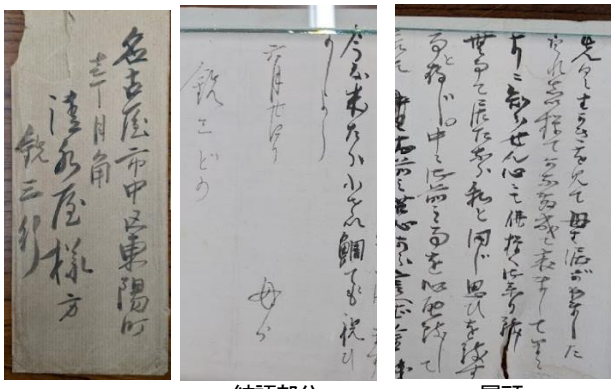
「森銑三刈谷の会」だより　No. 20

発行　2023/5/20（月刊・メールでの投稿歓迎）
例会　第３土曜日 14:00-16:00 市中央図書館　参加自由
バックナンバー 刈谷市中央図書館＞森銑三刈谷の会
共同代表 神谷磨利子・鈴木　哲 tetsu_s@katch.ne.jp



結語部分　　冒頭

図　母・森やすから森銑三への書簡（部分）。消印部分は切り取られているが 1924 年 6 月 24 日の書簡と判明。刈谷市歴史博物館所蔵

第 20 回（2023/4/15）「市立名古屋図書館から文部省図書館講習所へ」　参加 13 人　　神谷磨利子

今回は第 18 回（2023/2/25）に続いて、市立名古屋図書館時代の森銑三の生活について話を進めた。この時期 1924 年 1 月 1 日から銑三は土地の新聞『新愛知』に「偉人暦」の連載をする。その日が忌辰にあたる史上の人物を読み物風に、随筆風に書いたものである。銑三の持ち込み原稿を採用したのが主筆の桐生悠々であったことは、すでに本会第７回（2022/3/19）で話題に上がった。「偉人暦」を書くうちにさらに見たい本が出て来て、東京へ出たいという思いに駆られ、名古屋図書館を退職し 1925 年 4 月には上野の文部省図書館講習所に第五回生として入学することになる。この時のことを銑三は「もともと学歴のない私のことですから、資格には欠けてゐたのですが、名古屋図書館長阪谷俊作さんの推薦といふことで入学を許可された」（「過去を語る」『森銑三著作集』第 12 巻 p. 394）と語っている。しかし、『図書館雑誌』52 号（1923 年 3 月）に掲載の三回生の募集規定には入学資格を「中学校又は高等女学校卒業者。但し現に図書館事業に従事し其の成績優良なるものは此限りにあらず」としている。決して資格が無かったわけではない。銑三の希望を知っている阪谷館長は名古屋図書館での実績やさかのぼって刈谷図書館での村上文庫蔵書目録作りの実績を推薦書に書いてくれたことであろう。前回、銑三が児童室の担当から河村文庫や他の古書の担当に移ったと推定したが、それも実績の分野を増やすための阪谷館長の心遣いではなかったであろうか？さらに都合の良いことに、銑三の文部省図書館講習所への入学の前年（1924 年）に名古屋図書館から「塚本勝雄」が恐らく館長の推薦で依託入学していることも分かった（講習所の同窓会誌『図書館研究』第 5 巻２-4 号、1927 年）。塚本は名古屋図書館に戻ってから、銑三が中心になって開催していた「お伽ばなしの会」を再開し、長く継続している。

今回、名古屋の下宿の銑三に宛てた母の手紙（左図）を読むことができた。内容は、まさに「文部省図書館講習所」への入学の話が決まったとの銑三からの手紙への返信と分かった。「先日の葉書を見て母は涙が出ました」に始まり、「誠に喜ぶ事限りなし。東京行は母の願ふ処、前々より」と言っている。また「お前の書く事柄がいいと母は思ふ」とあるのは、『新愛知』の「偉人暦」を毎日読んでの感想であろう。「今度来たら小さい鯛でも祝ひましょう」と結んでいる。「六月廿四日」は 1924 年の事と認識された。

上京後、銑三は根津の下宿から上野の帝国図書館内の図書館講習所に通う。授業の前後や昼休みには図書館の江戸時代の写本を貪るように読み、写す生活をする（前掲「過去を語る」pp. 394-395、「思ひ出すことども」『森銑三著作集』続編第 15 巻 p. 13-16）。

また、『書誌』第２年⑴（1926 年 11 月号）には、ここでの講義内容を推測できる小論が掲載されている。「文部省図書館講習所第五期生」の署名で「伊勢物語の書誌」とある。「課題伊勢物語の書誌を、合議の上、五期生全体で急拵へに作成しました」とあるから、「日本書誌学」担当の植松安（東京帝大図書館司書官）が、提出された課題を投稿したものであろう。銑三自身も図書館講習所在籍中、『書誌』⑶（1926 年 2 月号）に「塙検校と名古屋の学者達」を発表している。塙検校が調査した河村家の蔵書はその当時市立名古屋図書館所蔵となり、野口道直の蔵書は村上忠順の蔵書となって後、刈谷図書館の村上文庫に納められていることなど、二つの図書館で得た事実がまとまっている。これを勝尾金弥は「一般雑誌に発表された彼にとって最初の記念すべき文章」（『森銑三と児童文学』、1987 年、大日本図書、p. 62）と評した。

塙検校は名古屋で秦鼎宅に滞在した。そのことを鼎から門人・刈谷藩医宍戸方鼎に書き送った手紙が宍戸家に残っていることにも銑三は触れている。本会第 9 回(2022/5/12)で読み合わせた「逝かれた宍戸先生」（『森銑三遺珠Ⅰ』1996 年、研文社、pp. 86-91）には、名古屋図書館在職中(1924 年)に宍戸俊治先生からその手紙を見せてもらったこと、その日が先生との永別になったことが書かれていた。

2021 年 9 月から始まった本会の積み重ねにより、少しずつ森銑三の経歴の実態が会員の共通認識になり、刈谷ならではの発見と気づきが出てきたことを実感している。

今後予定

2023/5/20（土）鈴木哲　『森銑三著作集』正続２編４版
2023/6/17（土）河橋育実　森銑三と松岡於菟衛翁